



## 絵本は心の栄養



10月27日から11月9日は、読書週間となっています。プロ野球日本シリーズは終わり、ラグビーW杯も決勝を残すのみとなりました。しばらくの間、テレビを消し、静かな秋の夜長を楽しまれてはいかがでしょうか。

さて、今年の夏に、本園の「えほんのへや」にある蔵書を、図書主任を中心に整理し、すべての絵本の情報をデータ管理できるようにしました。

本園の蔵書冊数は、その時点で1733冊ありました。一人当たり20冊以上という計算になります。この大量の絵本を、絵本クラブのお母様方が、定期的に点検・修理をされ、維持管理をしてくださっています。本当にありがとうございます。ただ、欠損ページが見つかったり、修理できないほど傷んでいたりしている絵本もあるそうです。

今月、新たに10万円分の本を購入しました。さらに、西中国信用金庫様から5万円分もの寄贈がありました。合わせて116冊。最新の絵本、懐かしい絵本が一気に入ってきます。

「絵本は心の栄養」とよく言われます。では、どのような栄養素があるのでしょうか。

- 1 子どもの心の安定が図られます。子どもは同じ絵本を何度も読んでくれとせがんでくれます。なぜでしょう。おそらく、そのお話の展開のおもしろさやスリル、言葉の心地よさを楽しんでいるのかもしれませんが。分かっているから安心して聞けるという子もいます。そして、お母さんと二人きりの時間を求めているのでしょう。特に、下の弟や妹が寝た後など、やっとお母さんを独り占めできる至福の時が来るわけです。自分が愛されていることを実感できるのがこの時間です。
- 2 現実では経験できない感情を経験できるのが、本の世界です。これは、幸町にあるこどもの本の専門店「こどもの広場」代表の横山眞佐子氏が、先日園に来られた時におっしゃったことです。確かに、幼い子どもは、現実の世界とお話の世界を自由に行き来することができる世界に生きています。「ねないこだれだ」、「さんまいのおふだ」などちょっと怖いお話には何度読んでやっても怖がります。でもまた読んでくれとせがみます。なぜか。お母さんと一緒なので安心できるからです。お母さんがそばで読んでくれながら、一緒に怖がり、一緒に喜んでくれるから怖さ半分、喜び2倍になるのだと思います。絵本を通して親子で共感し、豊かな感情が育まれます。
- 3 絵本の楽しみ方の一つに挿絵があります。中には、「おおきなかぶ」の挿絵を描いた佐藤忠良氏のような世界的な彫刻家や画家が描いているものもあります。幼児期はあらゆる感性を育む時期です。ですから、幼児期から本物の芸術に出会うことはとても大切です。身近な絵本だけでなく、美術館などもいかがでしょうか。たまに下関市立美術館でも絵本の原画展があります。大人よりむしろ子どもの方が、強いインパクトを受けるはず。そして、絵を見る目が肥えてきます。
- 4 絵本の読み聞かせによって言葉を豊かにすることができます。幼児期は、書いたり読んだりすることよりも、耳から母国語の美しい表現を聞くことの方がはるかに大切です。「てぶくろをかいに」、「花さき山」など、標準語、方言を問わず、子どもたちは、絵本の文章を耳で聞いて楽しめます。絵本で様々な言葉を体験することで、子どもの言葉は実感を伴いながら豊かになっていきます。人間は言葉を用いて物事を考えます。ですから、言葉の豊かさは、思考を深め、人間としての豊かさにつながるわけです。絵本は心の栄養、いろいろな栄養素がありますね。

さて、今夜は何の絵本を読んであげましょう？

(園長 寺本 明生)